
傘で始める魔物退治

織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傘で始める魔物退治

【コード】

N0296M

【作者名】

織

【あらすじ】

「魔王と共に戦ってください」
「……はい?」

パーティーは勇者と魔王とお姫様?どこにでもいる普通の高校生、高瀬光が魔王ともに異世界で傘を片手に魔物を倒す……はずのファンタジー&mp;コメディ小話。小説では、きつとない。ちょこつとしたアホ話をあなたに。

0 本目 異世界に招かれて、俺。

「魔王と共に戦っていただきます。」

「……はい？」

突然だが、冒険ファンタジー小説を読んだことがあるだろうか？ハードカバーでもライトノベルでも何でも良い。ちなみに俺場合は後者だが。勇者が魔王を倒す。まあ、王道だろう。しかし、あのありきたりなのに何故か楽しめてしまう、おそらく無くなる事はないであろう神ジャンル。俺は大好きだね。……読んでる分には。

なんでこんな話してんのかって？

よくぞ聞いてくれた。実は、……巻き込まれちゃったんだよおおお！！！！

あー、ありきたりだから経緯をダイジェスト版でお送りするとだな……

俺の名前は、高瀬 光。

公立高校に通う2年生。学力、容姿ともに平凡。身長170。きつとどこにでもいるであろう普通の高校生。そんな俺がいつも通り学校から帰ったところ、ポストに怪しげな手紙を発見、開封した瞬間、手紙から出た光に飲み込まれてしまったのだった。

「……様」

「 者様」

・・・ん、なんだ？何が起きたんだ？徐々に回復する視界。

「 じじい・・・は？」

最初に目に入ったのは色とりどりの光と綺麗な女の子。

歳は俺と同じ位だろうか？陶器のような白い肌。大きくぱっちりとした瞳は、知性の輝きを燈している。

そして長い銀髪は絹のようで、彼女の着ているドレスと良くマッチしている。大聖堂のステンドグラスの様な窓から入る光に照らされている彼女は魅力的で、お話に出てくるお姫様のようだった。

「 お気づきになられましたか？」

お姫様が話し掛けてくる。それと同時に思考も回復して・・・

「 ようこそいらっしやいまし」

「 えええっ？何処だよここ！！！」

お姫さんみたいなのがなんか言っているようだが、正直それどころじゃない。

まず驚愕。当たり前だ。何せさつきまで家にいたんだからな。

「ようこそいらっ」「つか、あんた誰だよ！どうなってんだよ！」

「ようこそ」「まさか死んだのか?!まじかよ!まだワールドカップ見てねーんだぞ!・・・くおっ?!」

一人でテンパっている時だった。突然身体が浮かび上がった。そして首には冷たい感覚。

「なんだよ!ってヒイイイ!」

何と俺を持ち上げて下さっているのはいかにも中世の騎士的なお方だった。しかもご丁寧に首筋に剣を突き付けなさっている。

「・・・お話を聞いて下さいますでしょうか?」

微笑みながら話かけてくるお姫さん。目が笑っていない様に見えるのは気のせいでは無いだろう。正直、コワイ。

「す、すみませんでしたあっ!」

余りの怖さについて反射的に謝る俺。我ながら情けない。その様子に満足したのか、お姫さんは話し始めた。

「それでは、改めてまして。ようこそいらっしやいました、勇者様。私はシャルロット・ファン・カームレイン。ここ、パスタリア王国の姫でございます。」

そう言っつて、ふわりと笑う。やっぱり姫だったのか。まあかなりの美人だし、高そうなドレス着てるし、だいたい予想はついたが・・・

・ん？勇者？

「勇者？俺が？どういうこと？」

「はい。実は数ヶ月前、魔王が“魔獣増殖炉”という魔物を無限に生み出す炉を作りました。そのせいで今まで少なかった魔物の数は急激に増加しています。今はまだ凌ぐことが出来ませんが、早く手を打たねばなりません。そこで過去の文献にあった召喚魔法を執り行ったのです。」

「マジかよ！夢じゃねーのかよ！」

「はい、夢ではありません。」

なるほど。何と無くだが展開が読めてきたぞ。テンパったから驚きなんてもうどっかいっちまった。

「だから異世界の俺が喚ばれたって訳か。」

「御明察です。まあこんなヘタレが来るとは思いませんでしたが。」

「容赦ないなアンタ！！」

てか姫さまがヘタレとか言っているのかよ！

「まあ良い、ってことは俺は魔王をぶっ飛ばして増殖を止めればいいんだな？」

「いえ。魔王を倒す必要はありません。魔王は味方ですから」

・・・ナンダッテ？

この姫さんは何を言っているのだろうか。

「まあ、驚くのも無理はありませんね。訳をお話しましょう。」

そう言って姫さん衝撃的な事を話し始めるのだった。

1 本目 そして魔王は馬鹿だった。

「まずは魔王についてから話す必要がありますね。まあ、魔王と言っても今回の魔王は自称です。」

「自称っ?!なんだそれ?!」

「私達も良く把握してはいないのですが半年ほど前、ここから北にあるランビエ山脈で大きな爆発が起こり、それと共に突如魔王と名乗る者が現れました。」

えー……。それはただの変人じゃないのか?

「それから、さっきもお話しました“魔獣増殖炉”を作ったのですが、その後直ぐにパスタリアに投降してきまして。」

「なんで?」

「それがなんでも虫系の魔物が苦手らしく、生まれてきた魔物に追いかけて回されていたら炉に近付けなくなってしまうと……。」

それって……、

「バカだ!バカ過ぎるっ!!だいたい虫系嫌いつて何?!魔王なのにな?しかも戻れないって。そりゃもうバカ通り越してアホだろ!!」

「人の事をアホだの馬鹿だの、全く最近の勇者殿は口が悪いの」

そついいながら突然出て来たのは、身の丈180はあるつかという、全身を黒い鎧でフルコーティングした巨体だった。

「ぬああつ！なんだお前！」

「何とは失礼な。我こそそなた達が話していた魔王であると言つのに。」

なんと御本人様が登場。よくこの話の流れで出て来られたな。やはりバカなのだろうか。

「ああデルフ、丁度良いところに来ました。大筋は話しておきましたから、後はあなたが説明をして下さい。」

と鎧野郎に話を促す姫さん。

「うむ。我は魔王。名はデルフリンガー。少々呼びづらい故デルフと呼んで貰いたい。」

待て、落ち着け、俺。今はツツコミより情報収拾の方が大事だ。

「・・・分かった。じゃあデルフ。一つ聞くが、何で増殖炉なんぞ造った？」

「ふむ。私の住家はランビエ山脈に有る故、周りに人などおらんぞな。」

「ふむふむ。だから？」

「何か大きな出来事なぞ起こせば人も寄っ来ようと思ってるな。」

.....静寂。

しよーもねえええ!!!

「姫さんっ!!!増殖炉より先にコイツどうにかしろよ!!!コイツ絶対バグってるってええ!」何寂しいからって気軽に世界の滅亡招いてやがる!!!

「はあ、しかしデルフは魔王と名乗るだけあって大きな力を持っています。だからパスタリア王国は、増殖炉を破壊する事と引き換えに処刑を取り消すと言う声明を出しました。」

と苦笑いの姫さん。

「そついうことよ」

分かったか。と言うようにフンツと鼻を鳴らすデルフ。確定、コイツは大バカだ。

「ならその力でさっさとぶっ壊せよ!」

「たわけっ!出来たらやっておるわ!我の力は強大ではあるが全ての制御は出来ぬのだ。」

うわ、バカに「たわけっ!」って言われちったよ。何だろ。すげえ哀

しい。

はあ〜〜〜。もう溜息しかでねーよ。これからどうなんだよ。

2本目 鏡と勇者と傘と

「ところで、全部終わったなら俺は元の世界へ帰れるのか？」

と姫さんに聞いてみる。

まあ大体帰れないってのがテンプレだけどさ。一応……な？まだやり残した事あるしさ。

「はい。大丈夫ですよ」

当然の様に話す姫さん。

俺にとっては予想外のご返事。

「マジで?! ホントに帰れんの?!」

「ええ、ただ場所と年代は指定出来ませんが。」

「一番大事な所だよソレ!! 変な所に飛ばされたらどうすんの!」

新手の詐欺師かテメーは! 送られた時代が世紀末だったらどうする気だ。ケ○シロウとかラ○ウとなんてお近づきなんか取りたくねーよ!

「まあ、本音を言えば勇者様がどうなるかと余り私達は困らないのですが」

わあ。この女ぶっちゃけちゃったよ。

「ホントあんた良い性格してるな!!!」

本当にコイツは姫なのだろうか。

「くだらん話はそれくらいにして、そろそろ本題に入った方が良くはないか？シャルロット。」

と俺の叫びをスルーしてシャルロットに話しかける大バカもとい魔王。

「くだらねえとか言うなよ！つかデルフ、元はと言えばお前のせいだって分かってんのか?!」

「そうですね。それでは継承の儀を執り行いましょう。」

ああっ、姫さんにまでスルーされたっ。勇者の立ち位置ってこんな軽かったっけ？

「ついて来てください。」と俺が召喚された部屋から廊下に出るシャルロット。言われた通り着いて行く俺とデルフ。

「なあ、継承の儀って何だ？」

「簡単に言えば、勇者様の武器を召喚するんです。」

シャルロットが歩きながら答えてくれる。

「へー。やっぱり剣とかか？」

「さあ、人によってまちまちですから、私にはなんとも。」

曖昧な返事をするシャルロット。出来れば剣より銃がいいのだが。使ったこと無いけどね。

「着きました。」と言われて通されたのは、俺の背丈位の姿見が置かれた薄暗い部屋だった。

「それではこの姿見に手を入れて下さい。」

「これに手を？」

「それは選定の鏡という魔具よ。その中にそなたに一番相性の良い武器がはいっておる。魔術そのものが形を持った物で有る故、外見はさほど気にする必要はない。」

と後ろから答えてくれるデルフ。なんと分かりやすい説明だろうか。不覚にも見直してしまった。馬鹿と頭の良さは比例する訳では無いらしい。

「さあ、入れてみるが良からう。」

デルフに促され恐る恐る鏡手を触れる。

鏡は俺に触れられた瞬間淡い青の光を発して、俺の手を受け入れる。液体のようなジェルのような何とも言い難い感触の中、ふと固いものに触れたのだった。

剣だろうか。柄のような部分を掴んで一気に引き抜く。

「そりゃっ。」

鏡から出て来たのは、槍のような物だった。黒く艶やかな柄、そこ

から伸びた部分は、頑丈そうな布のような物で覆われていた。それはまるで俺らの世界の傘のようで……。

引き抜かれた物を見てシャルロットが目丸くしている。隣に立っているデルフの顔は兜のせいであんなに分らんが、多分驚いているのだろう。そしてシャルロットがポツリと

「……傘……ですね。」

「……傘……じゃの。」

「ああ、やっぱり傘なんだ?!?!てかこっちにも傘あるんだ?!」

二重にびっくり。

「はい、貴族の女性しか使いませんが……」

「これは何かの間違いだろ！」

「はあ、しかし選定の鏡は一人一度しか使えません。」

気まずそうなシャルロット。

「えええ〜。これじゃ無理だろ。んじゃ何でも良いから普通の武器くれよ。」

「それが無理なのだ。」

気の毒そうな声で話し掛けてくるデルフ。

「なんで？」

「選定の鏡から取り出した者はその武器以外は使えないようになるのだ。」

「何だつて？どついうことだ？！」

「例えば、他の武器を使った瞬間毒に侵されたり、激しい動悸とめまいがしたりとかかの」

「何だそりゃ！ただの呪われた武器じゃねーか！！」

しかも動悸つておじいちゃんか！

「そもそも選定の鏡から出る武器は高性能な物が多くての。そんな問題は殆ど起こらなかったのじゃ」

「傘でどう戦えつてんだ！」抗議を込めてシャルロットに目を向ける。

「撲殺……でしょうか？」

「撲殺つ？！それつて戦い方じゃねーだろー！！」

なんて事言うんだこの姫さんは！

「まあ、しょうがないですから対策は考えて起きましょう。」

と溜息を吐きながら部屋を出るシャルロット。溜息吐きたいのは俺なんだが。

「出発まで一週間あります。それまでゆっくりなさって下さい。」

シャルロットは家来を呼び俺の案内を命じた後、そう言い残して去ったのだった。

3 本目 ブロークンハート壊された心で

一週間後、出発の日。

俺は城門の前でデルフと姫さんを待っていた。

ちなみにシャルロットが言っていた対策とは彼女自身がパーティーに加わるという事だった。何でもシャルロットは上位の治療魔法が使えるらしく、3秒以内なら死者さえ蘇生出来るらしい。

「どれだけ苦痛を味わっても死なないですから安心して下さいね。」
って言ってたっけ。彼女と俺の目的が違うように思えるのは俺だけだろうか。

そして、今の時刻はおそらく昼に差し掛かった位。集合は朝だったはずなのだが。

「遅い。何してんだアイツら。」

思わず呟く。だが奴ら来ない。

それから30分くらい経っただろうか、漸く城から二人が出て来た。

「おはようございます。」

「待たせたかの？」

何事も無かったかのように話し掛けてくるデルフとシャルロット。

「待たなかったとでも？」

満面の笑みで答える俺。
笑顔に隠れた怒りを察知したのか、少し慌てた感じでデルフが言った。

「待て、こつこれには深い訳があつて……」

「ほう、聞かせてみな」

「う、うむ。実は、ソナタの持っていた鞆の中にあつた“まんが”
と言うものを見つけて読んでいたら遅くなつてしまったのだ。」

「……ん？漫画？そんなものあつたか？自分の記憶を引っ張り出す。そして青ざめる。」

「……まさか。」

多分奴らが言っているのは友達から借りたエ○マンガの事だろう。
すっかり忘れていた。

「申しわけありませんでした。勇者様。あんなのを読んだのは初めてで。」

ニコニコ笑いながら謝ってくるシャルロット。

「いやっ。もういいからっ！怒つてないから。」

必死に怒つてないよアピールをする俺。

「それにしても勇者様って“ロリコン”だったんですね。」

ブッ！！

堪らず嘖き出す。ダニエルめ。ロリータものなんて貸しやがったのか。

「んなわけねーだろー!!」

慌てて弁明する俺。

「ええっ、じゃあ熟女萌えですか？」

驚いた顔のシャルロット。

「違うわっ！何でそうなる！」

「まさか、それ以上……。これは呼び方を変える必要がありますね。アウトローと名乗っては？」

「ちげーよ!!なんだアウトローって!!!!」

どんだけ愉快的な性癖してんだよ俺は!!!

「それでは一体……」

仕方ない。これ以上不名誉な名前を付けられても嫌だ。

「俺はもっと普通の同い年位の子が良いんだよ!そう、お前みたいな!」

そう言ってシャルロットを指差す。

驚いた顔のシャルロット。しかし直ぐに優しく笑って

「ごめんなさい。私、ヘタレは対象外なんです。」

「……………フラれた。」

「何でフラれたのだろうか。告っても無いのに。」

「あっ、目から汗が。」

「泣かないで下さい。勇者様は良い人だと思いますよ?。」

グサツ

シャルロットが優しく宥めてくれる。けれども俺の汗は止まらない。

「勇者様は良い人ですから。」

グサツ

「きっと良い人來ますよ。」

グサツ。パリーンツ。

「うわああああ……!」

壊されたマイハート。

さよなら。俺のプライド。

さよなら。俺の威厳。

ある晴れた日のこと。

ある少年は優しい言葉は人の心を壊すということを知ったのだった。

4本目 魔物の命、Priceless

「まずは資金を作りましょう。ヒカル。」

とやたら庶民臭い事を言うシャルロットもといシャル。何で呼び方が変わってるのかって？

シャル言わく「私が姫ってばれると面倒臭い事になりますから呼び方を変えましょう。勇者様ってばれるても面倒臭い事になりますのでこの際に。」だそうだ。という訳で名前と愛称で呼び合ってる訳だ。

ちなみにデルフは相変わらずデルフのままだったが。

「王国が出してくれるんじゃないの？」

「王国も魔物討伐の費用で手一杯なのです。」

「ふーん。んでどうすんの？」

「まずアラクネの森でポムポム狩りをしましょう。」

「ポムポム？」

「ポムポムとは俗に言うスライムみたいなものじゃ。かなり弱い故、倒すことは容易ではあるが、何分数が多くての。今や野放し状態になっておる。食用として需要がある故、ある程度稼ぐ事は出来よう。」

と解説をしてくれるデルフ。最初はバカだったのに最近解説役で知名度を上げているな。・・・うーむ。気をつけ無いと次のバカは

俺かもしれん。

「さあ、ポムポム狩りへレッツゴー！」

ピョンと跳びはねるシャル。ノリノリだな。不覚にも可愛いと思っ
たのは内緒だ。

この時の俺はまだあんな惨劇が起こるなんて知るよしもなかった。

所変わって森。森と言っただけあって見た目ヤバ気な植物がわんさか
生えている。

今俺達がそれぞれ持っているのは、50センチ位の瓶とすり鉢の棒
みたいな物。なんでもシャル言わく重要アイテムなんだそうだ。
森の中を歩いていると、

ぐにっ

あれっ？なんか踏んだような……。

足元を見てみるとピンク色の物体。およそ20センチ位だろうか。
そのピンク玉は昔ア○フルのCMに出ていたチワワのようなつぶら
な瞳をしていた。

「おおっ！可愛いなコイツ。」

思わず手に取る。感触は……そうだな。さしずめ水饅頭と言っ
たところだろうか。

ぶぎゅ、ぶぎゅとちよっぴりブサイクな泣き声をあげている。ああ、
癒されるなあ。これが今流行りのブサ可愛いだろうか。

「なあ、何かコイツ可愛いぞ。」そう二人に話し掛ける。

「おお、それがポムポムじゃ。」

と教えてくれるデルフ。

「ええっ？コイツがポムポムなのか？」

こんな可愛いのが？確かにスライムとは聞いていたが。正直、俺には狩れそうもないのだが。

「それではやり方をお見せしますから、良く覚えてくださいね。」

そう言って俺からポムポムを奪って持って来た瓶に入れるシャル。

「っておい！何する気だ！」

とてつもなく嫌な予感がする。

「何ってこうするんですよ。」

そう言ってシャルが瓶に棒を突っ込もうとする。

「やめろおおお！！！！！」

ぷんぷん！！

ぶぎゅぶぎゅっ！

ぶぎゅううう〜！！！！

突っ込まれる回数に応じて断末魔をあげるピンク玉。

「ポムポム〜！！！！」

俺の叫びも虚しく、あの愛らしいピンク玉はただの液体へと成れ果てていた。

絶望にうちひしがれている俺を見て、

「仮にも勇者様なんですからしっかりしてください！」

情けない無いなあ、もうっ！みたいに腰に手を当てて寝るシャル。

「こんな事出来るか！！お前らどんだけワイルドなんだよ！！！！」

「こんな事って、子供でも出来ますよ。」

「そんな子供見たくないわ！！！！」

「はあ、これだからゆとり教育は。」

シャルが溜息をつく。

「なんでそんな言葉知ってんだよ！」

「急に頭に浮かんで来ました。」

「宇宙人がテメーは！！！！」

「まあまあ、ヒカルはまだ慣れていないのである。今日のところは我々で殺る事にした方が良からう。」

そう言つて助け船を出してくれるデルフ。

おお、なんて良い奴なのだろうか。本当の魔王はコイツじゃなくてシャルなんじゃないかと思つちやつたのは内緒だ。

きつと殺られるから。

聞いたところによると、この世界では一枚あたり、鉄貨 1000円、銅貨 10000円、銀貨 10万円、金貨 100万位になるらしい。

ちなみに今日の収穫報告。

デルフの超人的な技で集めたポムポムエキス、10樽。

それによつて得た、銀貨 5枚、銅貨 一袋。

失われたポムポムの魂

プライスレス。

5 目 小鬼の中で輝いて

『かさ【傘】 雨・雪を防ぎ、また日光などをさえぎるため頭上にかざすもの。からかさ・こうもりがさ・ひがさなどの総称。さしがさ。』 広辞苑より

だそうだ。決して武器ではない。だから良い子は傘があってもマネをしちゃいけないよ？

ここはダブリス荒野。この世界で1番でかい荒野らしい。確かにこれは納得だ。見渡す限り荒れ果てた地が続いている。それだけじゃなく魔物のエンカウント率が高いらしい。

あの忌ま忌ましいポムポム狩りからはや二日。この二日でアラクネの森を抜けここまで来たのだが、奇跡的な事にあれ以来まだ魔物と御対面をしていない。それだけに俺達の緊張は緩みきっていた。

遠くに人らしきシルエットが人に見える。

「おい、シャル。あれ人じゃないか？」

丁度水も尽きた頃だ。給水ぐらい出来るといいのだが。

「あつ、本当ですね！ 少し水を分けて貰えるかもしれませんね！」
と嬉しそうにはしゃぐシャル。流石に女の子には荒野越えはキツいのだろう。俺だってキツいんだ。当たり前か。

「ふむ。なかなか良いタイミングじゃの。」

微妙に上機嫌のデルフ。あれ？コイツもキツかったんだ。ちよつぴり意外だ。

そして三人はそのシルエットへ向かって走り出す。

「おい。」

とりあえず手を振ってみる。気付いたのだろうか。そのシルエットは棒の様な物を上げ下げし始めた。その瞬間、

「待つんじゃー！ー！ー！」

急にデルフが鋭い声をあげる。

「なんだよ？」

「あれは、あれはゴブゴブじゃー！ー！ー！」

うるたえるデルフ。

「ゴブゴブ？」

「子鬼の一種で、凶暴かつ残忍な性格の中級使い魔です。正直かな

り強いです。」

うるたえるデルフに代わってシャルが説明してくれる。

「んじゃ逃げないとマズイじゃんか！」

「いや、もう無理じゃ。囲まれた。」

気付けばゴブゴブ達に包囲されていた。数はおそらく10匹位だろう。身長は低く、140センチ位しかない。かなりビビってるデルフ。

「つかお前魔王だろ！！中級ぐらい何とかしろよ！」

「出来ぬ！あんな気色の悪い生き物なぞ見たくも無い。」

とデルフが後退る。

「虫だけじゃなくてゴブリンもダメなのかよ！！！」

ホントに魔王かテメーは！

くそつ。役に立たねーな。そう思いながら辺りを見回す。気が付くとシャルの目にうつすらと涙が浮かんでいた。怖いのだろうか。怖いよな。

皆を助けたい。そんな思いが浮かぶ。胸が熱くなる。

その瞬間、傘が光を発した。今までにない激しい光を。

傘から力が流れ込んでくる。そして力の情報も。俺に与えられた力。

それは、えっ？・・・動態視力？

なんと強化されたのは動態視力だけらしい。

ええ〜〜。

まあ、無いよりはマシだろう。今はツッコミをする時間はない。だからそう思うことにする。

「ヒカル？」

不安そうに見つめるシャル。

「大丈夫。任せろ。」

そう言い残してゴブゴブ達の所へ走る。

「おい、ブサイク共！テメーらの相手は俺がしてやる！」

「djdggmjdt0jgga!!!」

話があったのだろうか。ゴブゴブ達は一斉に押し寄せてくる。

ぶうん。

不意に正面から振り下ろされるこん棒。でもその速度とても遅く感じられる。見える！見えるぞ！

俺はこん棒を体を捻りながら右斜め前に踏み出す事でかわす。そして振ってきたゴブゴブの裏に回り込んで傘で突く。

「addggmp」

何か良く分からん事を言って倒れたゴブゴブを掴んで投げる。

元々ゴブゴブは軽い。多分20キロ位だろう。

俺が投げたゴブゴブは三人ほど巻き込んで倒れた。直ぐさま倒れた奴らの、口では言えない急所に傘を叩きこむ。

「Agjm!!!」

急所を叩かれたゴブゴブ達は泡を吐いて失神した。

「まず4匹!」

やられた仲間を見て少しうろたえるゴブゴブ達。が、直ぐ俺に襲いかかってくる。

今度は2匹同時に左右からの正拳突き。

それを一歩下がることかわす。かわされた拳はそのままゴブゴブ達に吸い込まれる。

「Twmw!!!」

はい自滅。

これで6匹。

「Ajtg!」

さらにもう1体が殴り掛かってくる。

俺はその拳を左側に弾きながら右足を軸にして回転。傘のカーブになっっている所をゴブゴブの首に引っ掛けて、引っ張る。

ゴビュッ!

叫びにならなかつた息がもれる。

「秘技、寝首に水」

あつ、今バカつて思つたら？笑うなよ、一生懸命考えたんだから。

「さて、あと3体は、」

見渡して、青ざめる。俺には勝てないと踏んだのか、残りの3体がシャルとデルフに襲い掛かろうとした。

「シャル！デルフ！」

このままでは間に合わない。そう思った時、

「おつお主ら来るで無い！来るな！来るなー！！！」

錯乱したデルフが突如ゴブゴブに向かって叫んだ。
その瞬間、

ドゴオオオ！！！！

大きな音と共に雷が落ちた。そして残つたのは消し炭になったゴブゴブ達。啞然とする俺。

あーなんと云えばいいのか。
とりあえず俺の努力ムダ？
もう言葉もでない。

ひとしきり呆れたあと、安堵の為か、俺は腰が砕けてしまったのだ。
った。

「ありがとうございます。ヒカル。」

気付けばシャルが近くに来て俺のこを見つめていた。

「結局助けたのはデルフだけだな。」

「そんな事ありません。ヒカルは勇敢でした。その……格好良
かったですよ?」

顔を赤らめるシャル。
やべっ。可愛い。

「ほっ、ほら行くぞ!」赤くなった顔を見られたくなくて、俺は立
ち上がって歩きはじめるのだった。

6 本目 人生の転機、どうする？ どうすんの俺？！

蹄が大地を叩く音が響き渡る。

『2番が依然トップ！ それを1番が追い上げる！』

場内に実況のアナウンスが流れる。

『さあどうだ！ 1番が追い付く！ 競り合う！ おおっと？ 1番転倒！ 2番が巻き込まれる！ ああっと、1位は？ 1位は？ 何と7番だ！ これは予想外だ！ 大穴だ〜！』

耳をつんざかんばかりの歓声。その中には歓喜と悪態の声が入り乱れている。

「ヒカル！ それ当たってますよ！ ヒカル！ 凄いいじゃないですか！」

「なんと……あれを当ておったか！」

興奮しているシャルとデルフ。シャルがあまりの興奮に肩を叩いてくる。痛い！ 痛いって！

冒頭の流れで分かって頂けましたでしょうか？ 大変なことになってます。

ここは娯楽施設で栄えている街、ラスカス。

ダブリス荒野の中心より少し南に位置する、言わば荒野の中のオアシスというところだろうか。

俺達がいるのは、ラスカスの中でも人気の高いキマイラレース場。

まあ、名前のとおり競馬みたいなもんなんだけど。大穴が当たったみたいですね。

配当は、……金貨10枚？

「なに！ 金貨10枚だって?!」

金貨10枚って、1000万円相当じゃねーか！

軽いノリでやったのに……。

番号なんて声優のみず……ゲフンゲフン。に掛けて7にしたぐらいなのに。

隣のオッサンなんてよっぽど大損したのか発狂してるよ？

人生って理不尽だよな。

まあ、ビギナーズラックということで。

「何を買って頂きましたか？ 指輪、宝石、ご馳走して頂くのも良いですね。どうします？ デルフ？」

「そうじゃの。この際新しい魔具でも調達するかの！」

やんややんやと話に華を咲かせる二人。

コイツら俺にたかる気か？

「お前ら俺にたかる気か?!」

「いいじゃないですか！ 金貨10枚もあるんですから！ ケチだと女性に嫌われますよ?」

グサツ！

ヒカルの精神に180のダメージ。ヒカルからエクトプラズマが漏れた。

「シャルロット、言い過ぎじゃ。ヒカルも、本当の男ってものをシヤルに見せ付けてやったらどうじゃ？」

「それもそうだな！」

「復活が早いほう」

「こんなんで落ち込んでられるか！ さあ諸君！ 行こうぜ諸君！」

そう言っつて俺は勇んで市場へ歩きだした。

「……た、単純」

二人が呆れたように発した言葉は、もちろん聞こえてる訳もなかった。

というわけで、市場。

「はあ〜。いっぱいあんなあ……。」

市場には屋台のようなものが多く、通りに沿って延々と続いている。

野菜や果物といった青物を売る店や日用品などを売る店、はたまた剣や防具を売る店まで、その種類は数える気にならない程に多岐

に渡っていた。

「ラスカスは商業都市でもあるからのう」

「そうなのかあ。すげ〜なあ……」

「ふふつ。ヒカル、口が開きっぱなしですよ？」

「だってこんな初めでだぜ？」

キョロキョロと辺りを見回していた時だった。

「ふざけるのもいい加減にしやがれ！ ああ？！ ガキだからって容赦しねえぞ！」

突如響き渡る怒号。

驚いてその音源を探すと、そこには恰幅の良いオッサンと、12才くらいの小さな女の子がいた。

辺りの通行人は皆、我関せずといった風に見て見ぬ振りをしてい

る。
「くそつ、見てらんねえ。おいっ！ オッサン何してんだ！」

とオッサンと女の子の間に割って入る。

「なんだテメエは！ 俺はこのガキに用があんだよ！」

オッサンが唸るようにドスをきかせてくる。

女の子を見ると、その瞳には涙が貯まっている。

「この子泣いてんじゃねーかよ！ もう少し言い方があんだろ！」

「何もしらねえくせにでしゃばんなや！ 小僧！」

「何もしらなくたってやって良い事と悪い事ぐらい分かるだろ！
訳ぐらい話しやがれ！」

負けじと俺も怒鳴り返す。

「はっ……良いだろう、そこまで言うなら教えてやるよ！ こいつはなあ、俺が厚意でこのガキのキマイラをレースに出してやってるっていうのに金を払おうとしねえんだよ！」

「だっ、だってあんな金額……」

「ああ?! なんだって！」

「じっごめんなさい……」

オッサンに怒鳴られて、ビクツと縮こまる女の子。

「いくらなんだよ?!」

「はっ、テメエが払うのかよ?……良いぜ、そんなら教えてやる。
金貨3枚だ」

「なっ、それはいくら何でも高すぎませんか?!」

驚きに思わず話に入ってくるシャルロット。

「ああ?! 知らねえな。」

オッサンが嘲るように笑う。

「別に他の方法だって良いんだぜえ! そのガキのキマイラぶっ殺して肉にして売ったって、このガキかそこの綺麗なねーちゃん搔っ払ってどっかに売り付けたってなあ!」

ギヒヒとシャルロットを指差して不快な声で笑う。

シャルロットがギリツと拳を握ったのを見て、俺が手で制する。

「良いだろう。払ってやるよ。ほら、拾えよ。下種。テメーの腐ったプライド、俺が買ってやるよ。」

そう言っつて俺はオッサンの足元に金貨を3枚投げる。
するとオッサンの顔が憤怒の形相に代わった。

「喧嘩売ってるみてえだな……小僧!」

怒鳴りながらもきちんと金貨は拾うオッサン。本当に下種だな。

「買ってくれんなら金貨3枚で売ってやるぜ?」

そう言っつてオッサンを挑発する。大体ゴブゴブ相手に勝ったのにただの人間に負けるはずがない。

だから思う存分煽ってやったのだった。

「死にさらせや、小僧!」

「死ぬのはテメーだ！下種！」

二人が同時に動き出す。

そして、

「はっ、馬鹿が！格好つけやがって」

オッサンが去って行く。

そう、負けたのはおれだった。

何故かゴブゴブ達の時に使えた動態視力強化が使えなかったのだ。

「本当に貴方って人は……馬鹿なんですから」

呆れた声を出すシャルロット。しかし彼女の顔には優しい笑みが浮かんでいた。

「ああああのっ！」

声の方に顔を向けるとそこにはさっきの女の子がいた。

「あのっ！ すみませんでした！ その、助けていただいて……」

「ああ、気にするな。俺が好きでしたことだ。カッコ悪かったけどな」

「そんなことはありません！とても格好良かったです！それで、それ

で、あなたに恩返しをしたいんです!」

両腕をぶんぶんと一生懸命ふりながらしゃべる女の子。

「恩返しってつたつてなあ……」

そんな気ぜんぜんなかったのにそう言われてもなあ。

「良いんじゃないですか? ねえデルフ?」

「そうじゃの。その娘もこのままでは納得いくまいて」

さっきまで俺がボコボコにされる様をずっと傍観していたデルフが答える。

コイツめ、後で見てやがれよ? まあ、あそこで助けに入られても困ったのだが。

うーん。……何か複雑だな。

「ホントですか? やった! じゃあ家に案内しますね?」

びよびよこと踊るように歩く女の子。

「あつ、そうだ! 私、リザ・オルコットって言います」

「俺は高瀬光」

「私はシャルロットと言います。よろしくお願ひしますね」

「我はデルフリンガーじゃ」

「よろしくお願ひしますです。それでは行きましよう！」

リザはぺこりとおじぎをして、家へと俺達を案内してくれたのだ
った。

……余談だが、リザの家に着く前にデルフが少し行方不明になった。
まあすぐに帰って来たのだが。

風の噂によればそれと同じ頃、リザに詰め寄っていたオッサンの
組織の事務所が謎の壊滅を遂げたらしい。

更には、その後に孤児院に正体不明の大金が贈られてきそうなの。
誰がやったのか、その目星はまだついてないという。

6本目 人生の転機、どうする？ どうすんの俺?! (後書き)

5000PV越えたら番外編まがいのものをやりたいな…… (、)

えっ?その前に早く更新しろって?

その通りです、調子こきました。ごめんなさい、ハイ。

7本目 勇者へヤツ〈 に向かって吠える

「さあ、つきました。ここが私の家ですよ」

案内されたのは一軒の小さな鍛冶屋。

店は小さいながらも老舗のような堂々たる風格がにじみ出ている。

「あれっ？ リザの家は鍛冶屋だったんだ」

「そうですね。で、こっちがキマイラのグレモア。グーちゃんって呼んであげてくださいね？」

そう言って隣にいるキマイラの背に手をのせる。

出来ればスルーしたかった。

だってさあ……俺と同じくらいの大きさのライオンなんてありえんだろ！

いやまあライオンでは無いんだけどさ。

「そもそもキマイラって何なんだ？ もしかしてレースの為にわざわざっ？」

「キマイラは元々、対魔物用に造られた複合生物のことです。といっても実際に戦闘力はあまりなく、足が速いため主にレースや交通手段に用いられています」

「シャルロット！ 我の出番を取るでない！ ただでさえ出番が少ないと言っのに！」

説明をシャルに取られて焦っているデルフ。

「あー分かった分かった。俺が出番増やすように言っとくから。とりあえず落ち着け」

とりあえずなだめてみる。

「誰にじゃ？」

「もちろん上の人に」

「上の人?!」

デルフには分からんようだ。きっと誰かが補正を掛けているのだろっ。

「はいはい、そこまでにしてください。リザが困ってるじゃないですか」

パンパンとシャルが手をならす。

「ああ、悪かった」

「いえいえ、大丈夫なのですよ？」

若干引きつり気味の笑顔を浮かべるリザ。
会った時からたまに敬語の使い方がおかしく感じる時があるような気がするんだが、気のせいだろうか。

「リザ……、もしかして無理をしていませんか？ 敬語なんて使わなくてもいいのですよ？」

あつ、シャルもそう思っていたのか。

「えっ？ やっぱり変ですか？ よく言われるんです。そんなつもりはないんですが……」

戸惑い気味のリザ。

「……まあ気をつかってないなら別に良いんだけどさ」

「というか普通の敬語だとシャルロットさんと被るから。らしいですよ？」

「ちょっと待て！ 誰がそんなことを?!」

「もちろん上の人が」

「さいですか……」

この話が始まってから上の人の干渉率が急上昇してるな。

「あつあの、もし気を使うなど言ってくれらなしたら、そのつ、お兄ちゃんって呼んで良いですか?!」

顔を真っ赤にしながら上目使いで見上げてくるリザ。

ぐおつ。何という破壊力だろうか。

別にロリコンなわけではないがイケナイ道に外れてしまいそうだ。

「あつああ！ ぜっぜんぜん構わないぞ！」

うわ、必死だな。俺。

「ヒカル？」

ゾクリと。

それはもうゾクリとおぞ気がした。

見ればシャルがこっちを向いて笑っていた。でも……目が笑っていない。

「これでは本当にアウトロー（Out law）ですね」

絶対零度の視線を浴びせてくるシャルロットさん。

「ちっ違っわ！ 確かに少し良いとは思っただけどさ……」

「えっ、ええっ?!」

つい出た本音に狼狽するリザ。

「死刑」

「あの……シャルロットさん？」

「刺殺、絞殺、毒殺、どれが良いですか？」

笑顔っ！ 笑顔がコワイよ！ シャルロットさん！

「……弁明の余地は？」

「撲殺ですね？」

「一番エグいな！ デルフ！ 助けて！」

「出番が増えたらの」

ああ！ デルフまで！

くそっ、かくなるうちは……

「「あつ、逃げた！」」 とにかく逃げるしかない。怒りが冷めるまでは。

ダッシュ。ダッシュ。ダッシュ。

「待ちなさい！」

ひい！シャルロットが追ってくる。はええ！ 早過ぎる！

それになんだこのプレッシャーは！

ズドドッて感じの効果音が聞こえてくるぞ。

「いやあああ！ 助けてえええ」

……二時間後、ラスカス郊外で血溜まりが発見された。しかしいくら探しても死体は見つからなかったそうなの。

「はっ！」

ガバツと身を起こすと俺の身体には布団がかかっていた。なんか嫌な夢を見たきがするのだが……

「大丈夫なのですか？ お兄ちゃん？」

横にいたのは女の子だった。

歳の頃は十二歳くらいだろうか。

腰まで伸びた長いピンクの髪に白い肌と整った顔立ち。

大きな瞳は優しげで、まるで聖母のそのような慈愛に満ちている。

まあ俗に言う美少女なんだが、ロリコンじゃない俺にはこれからの成長に期待というところだろうか？

「……君は？」

「ええっ?! 私の事、覚えてないんですか？」

いきなりそう言われてもなあ。

「リザですよ。ヒカルが助けたんじゃないですか？」

隣にいたシャルロットが教えてくれる。

俺が助けた……？

ああ、思い出した。そうだった。……あれ? でもなんで。

「でもなんで？」 疑問が自然と口に出る。

「そっ、それはヒカルがああ男性に受けたダメージのせいで気を失

「ってしまったんですよ」

あれそうだったっけ？ いまいち思い出せないな。

まあいいか。

必要な事ならそのうち思い出すだろう。

「まあいいや。それより腹が減ったな」

「そうですね。じゃあご飯作ってきますね。シャルロットお姉ちゃん、手伝ってくれるですか？」

「もちろん、さあ行きましょう」

「ご機嫌な様子で部屋から出て行く二人。それとすれ違つようにデルフが入って来た。

「どうした？ デルフ」

「ああ、なんじゃ、そのお。すまなかった、ヒカル」

「何謝つてんだ？よくわかんないんだが」

「そうか、まあこつちの話じゃ」

変なやつだな。

「さあつてと、俺達も行こつぜ」

「知らぬが仏、かのう」

魔王が呟いた言葉はきつとヒカルには届かなかったに違いない。

8本目 勇者へヤツはバカですか？ はい、しかも鈍感です

「ところで親御さんは？」

リザ達の作ってくれた飯を食べながらさりげなく聞いてみる。

「実は私が生まれてすぐ……。祖父も海賊王になる！ といって去年出て行ってしまいました」

「……これは謝るのが先なのだろうか？ それともツッコむのが先だろうか？」

「……えっと、ごめん」

とりあえず謝ろう。

「なんで謝るんですか？」

不思議そうに首を傾げるリザ。頭にはクエスチョンマークが浮かんでいる。

本人は気にしていないみたいだ。

「じゃありザがこの鍛冶屋を？」

シャルが尋ねる。

確かに、来たときにはドアに“OPEN”の看板があった。

「はい！ でもあまり人は来ませんが」

えへへ、と恥ずかしそうに笑うリザ。

「それならヒカルもアレを改造して貰ったらどうですか？」

「そうじゃの。流石にあれではの」

「そうだなあ。やってくれるか？」

でも出来るのだろうか。何せ傘だしなあ。

「はい！ もちろん！ それで得物は何ですか？」

うつ、目がキラツキラしてる。……言えない、言えないよ！ 傘が武器だなんて……

「「傘」」

ああ！ 二人が言っちゃった！

「傘……ですか？」

キョトンとしているリザ。

そりゃそうだろうよ。傘ってそもそも武器じゃねーもん。

はあ、これは一から全部話さなきゃならないか……

「実はだな……かくかくしかじか」

てかデルフがもう話てるし！

「それでヒカルのかばんから漫画というものが……」

「チエエエストオオオ！」

デルフの顔面に向かって傘でフルスイング。

「ぶべらっ！」

一撃で失神するデルフ。練習しといて良かったかも知れない。

「まつ、まあ 大体分かったろ？」

汗をだらっだら流しながらリザに問い掛ける。

「うん。でも“まんが”って？」

「子供は知らんでよろしい！」

「リザ？ それはですね？」

今度はシャルか？！

「チエエエスト」

「私を殴るんですか？」

瞳を涙でうるうるさせながら上目使い、という上級コンボをつかってくる。

これは可愛くないとできない技だ。

ぐはっ！

2 Hit！

ヒカルの良心に1000のダメージ！

ヒカルの正義感に500のダメージ！

あとついでに消費税で75のダメージ！

「最後のはいらねえだろ！」

OVER KILL！

ヒカルの心は砕け……

「砕けるかあ！」

そうだ、俺はまだくじける訳にはいかない。

守りたい世界があるんだああ！
プライド

仕方ない、これは正直使いたくは無かったんだが……

俺はゆらりと立ち上がってシャルの所まで歩き、そして……

「お願いします。シャルロットさん！ここはどうかご勘弁を！」

THE土下座。

そう、日本人の心、土下座。

困ったときは土下座か逃げろって昔の人が言ってた気がする。

「とりあえず、デザートを買ってきて下さいますか？」

笑顔のシャルロット。そりゃもうとびっきりの笑顔。

「パシリかよっ！」

「リザ？ヒカルの漫画というのは……」

「ああっ！分かった！分かりましたから！

つたく、太つてもしらねえぞ……」

「なにか？」

「なんでもねえよ。……体重が体重がつて言つてたくせに」

「た、確かに少し体重が増えてしまいました！でも、でもっ！」

興奮した様子で詰め寄ってくるシャルロット。

顔が近いっ！

「ま、まあ少しぐらい太つたって誰も気にしねえって」

……沈黙。

そして……

「……ひ」

「ひ？」

「ヒカルのばかあああ！ うわーん！」

勢いよく家から駆け出すシャルロット。

うわーんってあいつ……キャラ崩れすぎだろ。

「追いかけた方がいいですよ？ というか追いかけないとダメですよ、お兄ちゃん」

「やっぱり？」

「うん。あれはちょっと……」

そんな呆れた顔しないで下さいよ、リザさん。

「まあ少し言い過ぎたけどさ」

「少しじゃないですよ！ あんな事はっかり言ったら恋人なんてできませんよ？ まっまあそうなら、わっ私が……」

がぶっ

遂にリザにまで言われてしまった……。
がっくりうなだれる俺。

「って聞いてくださいよ！ うう、せつかく頑張ったのに……
もう！ いつまでウジウジしてるんですか！ 早く追いかけてくだ
さい！」

腰に両手を当てて、怒ったように言ってくるリザ。

「あの……なんで怒って」

「怒ってない！ ほら立つ！」

「ハイッ！」

「ダツシユ！ 傘は改造しておきますから。ちゃんと仲直りしてく
る事！ いいですね?!」

「サー、イエッサー！」

そう言って家を飛び出す俺。

こえええよ！ 女の子こえええよ！ そんな恐怖に衝き動かされ
て街をさがしまわったヒカルなのであった。

このあとシャルロットを見つけてから色々あったのだが、それは
また別の話……。

8本目 《勇者へヤツ》はバカですか？ はい、しかも鈍感です（後書き）

『座談会、今日の出来事』

デルフ「のう作者、今日はまだしも、最近私の描写が激減しているのはきのせいかな？」

作者「い、いやそんなことは……ある、けど大丈夫だ！ 次は大丈夫だ！」

デルフ「ホントかの？ もし無かったら……分かるのう？」

作者「はっはい！ というわけで次回

『だってドラゴンだもの』

乞うご期待！」

リザ「サービスサービスう」

ヒカル「エ、アの最後パクっちゃ駄目だろ！」

9 本目 だってドラゴンだもの

「あつ、お帰りなさい。」

ちゃんと仲直り出来たみたいですね」

家に戻ると待っていてくれたらしいリザが駆け寄って来てくれた。

「ああ、なんとか……な。ところで傘は？」

「ええと……一応出来たのは出来たですが。一つしか拡張できませんでした」

少しうなだれ気味のリザ。

「できたの？」

傘って武器に出来るもんなのか。ある意味驚嘆に値するぞ。

「はいです！ 能力は部分的セミ・エンチャント魔力付与です」

「セミ・エンチャント？」

「はい。簡単に言うとこの傘の魔力を身体の一部に取り入れて身体能力を上げるというものです」

「おお！ 何かスゴいなソレ！」

これで俺もエクス リバーをもったアーー ー王よろしく英雄になれるのだろうか？

……宝具は傘だけだ。

「ホントはロ ットブースターとか波 砲とかビー サーベルつけたかったんですけど……。」

意外とわがままボディでした……。」

本当に悔しそうな顔をしているリザ。

この娘は俺を一体何と闘わせるつもりなのだろうか？

ガン ムだろうか？

生身で歪んだ戦場に介入させる気なのか？

それともツイン スターライフルを持つ羽の生えたガン ニウム合金と闘わせる気なのか？

「とりあえず、わがままボディってそういう使い方じゃないと思うぞ……。」

「はあ、出来ればファ ネルかドラ ーンつけたかったなあ……。あれは漢おとこのロマンだよ〜お兄ちゃん？」

「リザは男じゃないけどなあ」

そんな恋する乙女みたいな顔でファ ネルとか言っちゃいけません！

「分かってるです！ 男だったらお兄ちゃんのお嫁さんになるって約束守れないです！」

「初耳だけどなソレ！」

何を言い出すんだこの娘は！

「ひ・か・る？」

風鈴を鳴らしたような美しい声が響く。

……振り向けない。

すさまじい瘴気が漂ってくる。それはもう具現化するほどに……シャルロットさんは魔王なんですかね。

「やめておけ。話が進まぬではないか」

見兼ねて出て来たのはデルフ。

シャルもそう思ったらしく渋々だまる。

マンネリ化を未然に防ぐとはなかなか作者孝行な奴である。

「これで出番が……」

これが無ければの話だが……。

「ところでその傘は？」

「あっはい！ 今持って来るです！」

ダッシュで家に帰るリザ。あんなに急がなくても良いのに……。

「これですー！」

さっき凄いと聞いたせいか、ほめてほめてと言いたそうな顔のリ

ザ。

なんか犬みたいだ。

個人的には「わふー」と言って欲しい。

ただ、その純真無垢な女の子に抱かれていたのは変わり果てていた相棒の姿だった。

「あの……リザちゃん？　なんでフリフリがついているのかな？」

そう、今までスリムで知的なオーラを放っていた相棒の身体には白いレースがふんだんにあしらわれていた。

「え〜。だって可愛いじゃないですか」

「可愛くしてどうする！　何の使い道もないもんをこんなにつけるなよー！」

これでは違った意味での勇者になってしまう。

「使い道はあるですよ？　とりあえず触れれば切れます」

なるほど……だから俺の手が血だらけなのか。

「っってもっと早く言ってくんない?!」

なんて極悪な兵器になってしまったのか。

「てかなんでリザは切れ無かったんだ？　抱き抱えて来たのに」

「ああ、それは認証プロテクトが働いているからです。」

「認証プロテクト？」

「登録した人間には危害を加えないようにする言わば鍵みたいなものです。一応デルフさんとお姉ちゃんと私が登録されてます」

俺の名前が無かったのは気のせいかな？

「俺は？」

「あっ、え〜と。忘れてなんていませんでしたですよ？」

おもいつきり目え泳いでるけどな。

「ほう。嘘をつくのはこの口か？」

リザの頬を掴んで引っ張ってやる。

「ひはひへふ。(痛いです) ひゃへへふははひ〜)やめてください
い〜)」

ふはははっ。手をじたばたさせても無駄なのだよ。

こんな風に仲睦まじく？ 戯れている時だった。

『ツカサだ！ ツカサが来たぞ！』

街中にけたたましく警鐘が鳴り響いた。

「何？ ツカサじゃと！」

ツカサ君？ 誰？

そんな疑問をよそに一番先に動いたのはデルフだった。

「ええい、何故このような所に。」

言うのが早いか、デルフの身体が光に包まれて消えた。

おそらく転移魔法だろう。

尋常では無いデルフの様子からして、ヤバイもの何だろう。

「ツカサってなんだ?!」

思わずシャルに問い詰める。

「落ち着いて下さい。ツカサとはお察しの通り魔物です。それもおそらく5本の指に入る程の。俗称を長虫ツカサと言って」

長虫？ 虫か?!

だとしたらデルフに闘えるはずがない。

あのバカ！ 無理じゃがって。

俺は傘を握りしめた。使い方はシンプルでエンチャントしたい部分を思い浮かべるだけらしい。

先ず足を思い浮かべる。途端に足を淡い青の光が包む。力がみなぎるのを確認しながら俺はデルフが行ったであろう方向へ走りだした。

「あつ、ちよつとヒカル！ まだ話は終わってませんよってもう行ってしまいましたか……」

空を仰いで嘆息するシャルだった。

走る。走る。走る。

スゴいな……。身体が軽い。

遠くではおそらくデルフが使った魔術のせいであろう爆発が連続的におこっている。

デルフが闘う意志を失っていないことを確認してまた脚に力をこめる。

あと少しだ。爆発による砂煙がちかくなってくる。

気付けば街から大分離れている。ここならば街に被害はでない。

そう考える少し安心出来たのだった。

いた。デルフだ。

そしてデルフが相對している的方向を見る。

取り巻いていた砂嵐もクリアになってきて姿が見えてきた。

なんかデカ過ぎねえ？

見えてきたのは、10メートルはあるつかという巨体。首は長く、そのさきの顔は爬虫類のようで獰猛そうな感じが見てとれる。

身体は見るからに固そうな鱗で覆われていて大樹のような四肢に支えられついる。

明らかに虫ではなかった。というかドラゴンって言うんじゃないか？

「だってドラゴンですもの」

気がつけば隣にはシャルとリザがいた。

転移魔法で飛んできたのだろう。

色々言いたい事はあるんだが……一つだけまず言わせてくれ。

「うっそおおおん！」

10本目 バカではなくて素直と言って！

「これをどうしろって？」

目の前には明らかにサイズがおかしいドラゴン様とその顔面におもつくそ爆発をプレゼントなさっている魔王様のお姿。

いや、ホントにデカイよ？ 例えるならデストロムガンムとストイクフーダム位の差だな。

なんでガンムかって？ 俺が好きだけです、ハイ。

そんな現実逃避をしている間にも爆発がつづいている。

わあ、なんて素敵なお光景だろうか。素敵過ぎて胃の辺りから酸っぱいものがでてくる。

はあ……なんだかなあ。

傘強くなったからって調子こきましたね。俺今は反省している。

「デルフのサポートをしてきます」

シャルが戦闘に加わろうとして、それにつられてリザも

「そうですね。助太刀するです」

肩をぐるぐる回している。準備運動だろうか。やる気満々みたいですね。

……OK、OK。

名残惜しいがそろそろ現実逃避からリターンしないと隣の二人が俺を置いてドラゴンさんの所に乗り込みまじまいそうですね。

はぁ、とため息をついて傘を握り部分的に力を流していく。最初は腕、胴、そして脚へ。流れ込む力が安息感を与えてくれる。よし、悪くない。

いくらヘタレと言われようが女の子だけに闘いはさせられないよな。

「あー……二人とも。俺が先に行くから」

任せろって言えない自分が辛いね。

とりあえずできるだけ恰好をつけたセリフを言って、俺はデルフのもとへ駆け出した。

「デルフ！ 大丈夫か？」

「おおっ！ ヒカル、待っておったぞ。」

ドラゴンさんに魔術をぶっ放しながら答えて下さる魔王閣下。

「そいつはどーも。んで、どうするよ？」

ここは戦闘経験の豊富そうな閣下に従う方がいいよな。

「うむ、取り敢えず突っ込め？」

何故にコイツは疑問形で返してくるのだろうか。

「突っ込めってバカかテメエは！」

「大丈夫じゃ。ふおろくはちゃんとする？」

「フォローすら発音できねえ奴を信じられるか！ しかもまた疑問形かよ！」

「It is pity that you are chick
en（あなたがチキンで残念です）」

「だあつ！ 英語でしゃべんな！ 何て言ってるのかわかんねえよ
！」

「あなたは最高です。
とிட்டたのじゃ。お主が頼りなのじゃ。」

なんとということだろう。 最高なんて生まれて初めて言われたよ
！ かーちゃん！

えと、いといずびていざつ……ん？ 何だっけ。
まあいいや。たぶん『びてい』つてのが最高って意味だろう。そ
う俺の勘が言っている！

「ふつ、安心したまえ。この俺の『びてい』な鬨いに酔いな！」
最高に『びてい』な笑顔を浮かべて、俺はドラゴンに向かって特
攻を決めるべく走り出したのだった。

「はあ、アヤツは『pity（残念な）』の意味を知っておるのか
のう……。まあ、扱いやすいから良いのじゃが。」

一人、少し罪悪感に駆られた魔王がいたとかいないとか……。

11 本目 本気出すか……って多分死亡フラグ

「いいいやっほおおお！」

今の俺、最高！ ザ・ぴて……ぴ？ あれ？ なんだっけ？

……。

ま、まあ俺は最高な訳だから？ 例え俺が俺を表す言葉を忘れたとしても、それはただ単にその言語が俺を表すほどの言葉をもっていないだけだ！ 覚える価値も無いくらいしか俺の魅力を表していないだけだ！

つまり言葉が俺に追い付いてないだけなのだ！ うん、そうに違いない。

おい、そこのお前。

追い付いてないのは俺の頭だとか思っただろ？

ふっ、ふん！ ま、まあ俺は寛大だからな。気にしないさ！ 気にしてないんだからな！ ホントだから！

「つーわけで……死ねやこのトカゲやるおおお！」 取り敢えず俺の精神安定の糧となりやがれ。

脚に魔力を込めて跳躍。10メートルなんて高さなんのその。

「あーいきゃーんふらーい！」

ツカサの頭と同じ高さでなおかつ一メートル位離れた所に突如、

黒い足場が現れる。

おそらくデルフの仕業だろう。いー仕事してますね。
そして着地。

そのまま着地の勢いを殺さないようにスイングを開始する。

「オルアアア！ 吹っ飛べやあああ！」

周りの空気を巻き込みながら傘がツカサの顔面にめり込む。

そして次の瞬間ツカサの顔が高速で視界からフェードアウトする。
やべえ、超気持ち良い……。

そう、それは俺がこっちの世界に飛ばされる一ヶ月の朝。いつものように俺を走って迎えに来たダニエルが4tトラックに撥ねられた時のような爽快感だった。

「の`わっつ！」

ツカサの尻尾の先端が鼻先を掠める。

あつぶね！ 鼻とれるとこだった。

なんてヤツだ。全く効いてないみたいすね？ なにその「うわー、寝違えたあ。首いてえ」みたいな顔。

いやドラゴンが寝違えるのかどうかしらんけど。

しょうがない。本気を出しますか。

身体のをぬき、倒れるようにツカサの元へ足場から飛び降りる。
足場から足が離れる瞬間、魔力を込めた足で身体に回転を加える。
トリプルアクセルのごとく回転。まあトリプルではないけれど。

ありえない程の遠心力に傘を持って行かれないように腕に魔力を込めてしっかりと握りしめる。

「カあああサコプタああ！」

高瀬流傘術、秘奥が一　カサコプター。この技は、ありえない脚力を使って身体を回転させ、傘に付いているフリフリで相手をスライサーにかけたキャベツのように引きちぎるというキューティーかつ残酷な技なのだ！

ちなみに使った後三日間は、強すぎる遠心力がごちゃませにした三半器官のせいで立てなくなるのだが……。

そういう訳で突進中なのだが、何故か避けるでもなくツカサが口を開ける。

その口にはほのかな明かりが灯る。

あー。これはもしかしなくても……。

奴の口の中の光は消えるはずもなく、むしろ目に見えて大きさを増していく。

収束する光球。近づぐごとに増す熱気が肌を焼く。焼き肉の気持ちがかかった気がする。

まあ、これは死んだな。

辞世の句「カサコプター　走りだしたら　止まれない」

むしゃくしゃしてやったが今は反省している。

そして俺の意識は火球に飲み込まれた所で途切れた。

12本目 理不尽って多分気のもちよう……だといいな

「……………さい」

あれ、なんだ？

「……………きなさい」

確か俺、ツカサと戦って火の玉に飲み込まれて……

「起きなさいと言っているのがわからないのかしら？」

なんか聞こえるね？　なんか前にもこんなことがあった気がする。

そう思いながら目をあける。

目の前にいたのはゴスロリチックな服を着た金髪美少女。だが、確かに美少女なのだが特筆して言うものがないという良くわからない顔立ちをしている。

「なんだ？　お前？」

「私？　私は女神よ？」

……………うわ。出たよ自称。しかも今度は女神だってよ。この世界は自称がブームなのかね。

「取り敢えず、その哀れんだ視線はやめて頂戴。不快だわ。」

不快だわ。だってさ。ああ、もうあれだね？　成り切っちゃってるね。こんな年からこんな人格なんて可哀相に。

「やめて頂戴と言ったのが分からないのかしら？」

「つて、ぬお！」

気付けば喉元………というか俺の周りに抜き身の剣が取り囲むかのよりに浮かんで、もとい突き付けられていた。

「す、すみません」

ここで謝ってしまう俺はきつとへタレなのだろう。

「分かれれば良いわ。ただ、気をつけなさい。言った事をもう一度言うのは嫌いだわ」

「ところで、お前誰だ？ てかここどこだ？」

はあ。とため息をつく自称女神様。

「貴方はお馬鹿さんなのかしら。まあいいわ。お馬鹿さんにも分かるように説明してあげましょう」

「馬鹿っていうな！」

「まずさつきも言ったように私は女神、名をタチバナ」

「スルーかよ！ つかタチバナってなんだよ！ なんで金髪なのに日本より?!」

「うるさいお馬鹿さんね。死なないとわからないのかしら？ いったん死んでみる？」

そういつてまた剣を召喚するタチバナ。

「すみません」

きつとここで謝ってしまう俺はヘタレだ。分かっているから言わないで？ 凹むから。

「まあいいわ。簡潔に言うと、力を得た貴方は凶に乗って無謀にもドラゴン相手に特攻。そして返り討ちに会って肉体は瀕死。意識だけを傘である私の中に引き込んで今に至るということよ。全く、本当にお馬鹿さんね」

「ええ？ 女神じゃねえじゃん！」

「私は傘の女神、もっと詳しく言えば選定を司る女神と言うところかしら」

「選定つて、まさか傘つてお前のせいだったのか？」

「そうよ。なかなか愉快だったわ」

ふふっ。と上品に笑うエセ貴族。

「この愉快犯が」

「面白いことを言ったつもり？ センスが無いわ。お馬鹿さん」

「バカって言わないでください！」

もっ半泣きだよ！

「んで、俺瀕死なんじゃん？ どうすりゃいんだ？」

「そのために呼んだの。多少遊び心が入ったとはいえ私の使用者だもの。死なれてしまうのは気持ちの悪いものではないわ」

「じゃあ傘なんて渡さないで欲しい。」

「というわけだから力をあげるわ」

「マジで?! えらい簡単にくれるんだな」

「実は結構いいやつなのかも知れない。」

「ただ一回発動するごとにめまい、吐き気、左手薬指の爪が異様に早く伸びる、運命の赤い糸が切れるのどれかが無作為に起きるから気をつけることね」

「なんだよ、そのロシアンルーレットみたいな罰ゲーム」

「怒る気にもならん。というか何から怒っていいのか。」

「ちなみに副作用は私のせいではないわ。さあそろそろ行きなさい。私の名前を念じれば発動できるから。私はもう寝るわ。少し話すぎたもの」

「ふわあと欠伸をしてあっちへ行けの手振りをする夕チバナ。」

「おいちょっと待て！話はまだ」

言い切らない内に目の前が白くなる。「健闘をいのるわ」という
声を聞いた気がした後、俺の意識は完全にホワイトアウトした。

13本目 格好良いと強いはイコールではない……多分。

「……ん、んあ？」

ぼんやりと目を開ける。 定まらない視界に目をこする。

「起きたんですか?!」

「大丈夫?! お兄ちゃん!」

近くでする悲鳴にも似た声に意識が覚醒する。

「おお、俺生きてる」

そう言いながら身体を起こしそうとすると

「ヒカル!!」

「お兄ちゃん!!」

「おうふっ!!」

てな具合にラグーマン並みのタックルをみまってくれるお二人。

「お、まえらなあ! 死ぬだろうが!」

「きゃっ」

「きゃあ

ぺいっ! と二人を投げ出して立ち上がる。

「何しやがる!」

半ばぶちギレ気味の俺。 いやだって、あり得ないでしょ？
こいつらドラゴン相手に立ち向かおうとする奴らよ？ せっ
かく生き返ったのにタツクルで死亡とか。爆笑ってか失笑？

いや本当に痛いのもおね、さっきから身体の中の何かがとめ
どなく溢れそうなくらい。

「ごめんなさいです。でも、お兄ちゃんが死んじゃったかと思った
ら……思ったら……えぐっ、ひぐっ」

途端泣き出すリザ。

「あ、いや、わ、悪かった」

いや、そんなふうに泣かれちゃったら、お兄ちゃんもおこれま
せんよ？

「ごめんな、ありがとう」

慰めるようにリザの頭を撫でてやると、ふに、と柔らかい表情
を浮かべるリザ。

かんわいいなあと、和んでいると不意にゾクツとするような悪
寒が走った。

「へえ、リザにはそうで私は無視ですか。そうですか。こんなに、
こんなに心配したのにリザには膝枕で頭なでなで、私はスルーで
すか。私だって、私だって」

「あのー、シャルさん？」、「どうしてくれましょう。いつそサクッ
と殺つてしましましょうか。ふふふ、ふふ」

にやり、としながらぶつぶつと独り言を呟くシャル。

怖いよー！ 怖いよー！

「さあ、ヒカル。こちらへいらっしやい？」

シャルさん！ あなた性格かわってますよ？！

「ふふふ、ふふ」

ゆらり、ゆらりと近づいてくるシャル。

「いや待て！ わかった！ 膝枕でもなんでもしてやるから！

とりあえず、あのばかでかいトカゲぶっ飛ばしてから、な？

な！」「っ、本当ですね！」

何か尋常じゃない食い付きを見せてますね。

「あ、ああ」

「分かりました。では覚悟をしてくださいね？ それでどう

やって倒すんですか？ さっきみたいなのはまたおなじですよ

？」「……変わり身早いな。ん、まあいいや。見ててくれ」

そういつて、傘をもって立ち上がる。不思議そうに小首を傾げる二人を余所に俺は夕チバナの名を心で叫んだ。

瞬間、俺を光が包む。そして目が眩むような光が消え去った後の俺を見て、二人が、いや俺を含めた三人の目が丸くなる。

俺の腕には白いフリフリの着いた黒地の袖。

下半身には何重にもなったフリフリの黒地のスカート。

黒くフリフリの着いた傘を携えて。

おれは、そう、あの夕チバナのような、フリフリゴスロリの今をときめくメイドちゃんになっていたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0296m/>

傘で始める魔物退治

2011年3月20日09時23分発行